



類題發句集冬部

十月

蝶夢編

更衣

のせけや表着るる更衣之

一井

小春

まご重ん袖と如り衣之元

李下

時雨来のあそく一日小春は

踏連

てゆく此日の夜重ん小春は

拋妓

昼中より一時さくら小春は

理然

小六月

城小は籠子出き繁小六月

小春

夕陽の涼そりさ軒小六月

窓黄

神送

夜志くしわ一云ぬくのおやしく  
馬の鞍が中老を神送  
以上不意よ木の家を神送  
目よぬぬ連のぬぬ神と云  
ぬぬぬぬ雲のぬぬ神送  
留白のぬぬ荒ぬぬ神のぬぬ  
神垣のぬぬたのりぬぬ太丈  
ぬぬぬぬとて后もぬぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

冬一  
一露  
正秀  
露川  
目録  
際乙  
芭蕉  
凍菖  
春平  
若狭  
东君

神の道

亥の子

達磨忌

芭蕉忌

志くしと海後まじりぬぬぬ  
重箱りぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
お秋には伏虎よぬぬぬぬぬぬ  
達磨忌や梅の腕もぬぬぬぬ  
たのゆ忌や柳子よぬぬぬぬぬ  
達磨忌や梨梅もぬぬぬぬぬぬ  
達戸忌やゆぬぬぬぬぬぬぬ  
きうぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
芭蕉忌ぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

徐寅  
尾張  
ぬぬ水  
産元  
曾良  
乙由  
磯海  
伊勢  
許虹  
棠故  
史邦  
支考

御歌傳

九歌傳也神のやうに酒已外  
杜も掃もお水りりりり神傳  
菖蒲了り為衣付と神御歌傳  
上人衣敷り為衣付御歌傳  
六歌傳也傳の証了り後より  
おあつる月夜より二十夜  
極楽山つりり月夜二十夜  
浮の衣皮足袋了り十夜  
勢既も立付生衣十夜  
祖又傳の系もあつる十夜

芭蕉 治園 許六 史邦 巴靜 壽仙 浪化 許六 乙由

十夜

蛭子傳

元は神傳也上袴忌をより  
振賣の房あつる蛭子傳  
志那板小判ちりり元は神傳  
蛭子傳大忌履もよふまに  
精進の布袋あつる蛭子傳  
柳の葉小神も元は神傳  
水清りし神も元は神傳  
聖志あつる神も元は神傳  
神も入つる神の葉も  
一月の為衆も掃く神も

芭蕉 其角 史邦 巴靜 許六 乙由

誓言文掃  
神取越

神迎

燻用

炉罏や左友死ゆく燻の象  
燻用り産成るる子たは  
がひまに遠出給へたりと  
ふれまや漫くつたる灰の石  
燻用やまかちあつ電灰  
口切下場お産そあけり北  
口ぬわ今子他り一狐とも  
口おりや禱のまゝに線薙菊  
口切あ四月お産治のまひぬ  
まふそりてまふそりて雨

桑口切

色蕉 万平 許六 車達 夜綿 芭蕉 木守 其角 紀末 毛蕉

初志り様と小恙と何けく  
考お羽もふつろいぬ神り  
新葉の登根の糸や川岸  
ひくろの塩の結目初志り  
朝日や三粒降くも初時雨  
神り几許かま骨のあつあつ  
新葉の石もあつ初時雨  
道故くひ遠いひつる初志り  
その末のあつ電灰  
神りあつ電灰

去来 許六 野坡 休斗 西冷 酒巻 汎米 乙由 宇中

晴雨

相の安れ次りくく部々  
夕暮れは去りてさるる  
雲よりも先へあふれ  
一時南志の風吹く  
去く朝や田の荒株の馬  
くく新の青きめはつ  
午羽り入りはつて去  
くく我まらぬく日  
去来のまらぬく我  
一方去来教のまらぬ

春園 柳儿 去来 芭蕉 如及 本山 露沾 芝角 文章

冬四

馬より仲の時南志の  
馬より仲の時南志の  
ありのやうく去りて  
さ夜をいづる遠へ  
此の字をいづる時  
るうりて休田の  
表筆の去りて  
若くは去りて  
時雨きや去りて  
持持の去りて

杜園 鶴水 岩紫 北枝 乙抄 李由 比翁 子那 正秀

川音時雨  
松風時雨  
志ま記  
初霜

初霜ふりし折る来時時雨  
 芋揃り男あやむ起る時雨  
 蓬の葉おき切る時雨  
 川音松風月あきぬ  
 時雨ぬいほく松風のたて音  
 色くす傘お直すと志ま記  
 志ま記

泥足  
風國  
希因  
乙疏  
北達  
水枝  
文考  
園指  
文考

冬五

霜

志ま記  
 初霜ふりし折る来時時雨  
 芋揃り男あやむ起る時雨  
 蓬の葉おき切る時雨  
 川音松風月あきぬ  
 時雨ぬいほく松風のたて音  
 色くす傘お直すと志ま記  
 志ま記

千川  
北枝  
北坡  
色蕉  
夕北  
文考  
智足  
一村  
文考  
の足

霜柱

雲夜

初雪

雪志しや城ありて暮草もひ  
きくく吹あけし海あり雲柱  
をわたりて已くくや去る  
霧の衣はまろくくや去る柱  
一色もろくくあつたれを夜に  
細直やう雲もろくく雲柱に  
雲の夜や大の子れろくく様の下  
さし雲もろくく志まふ藤のま  
初雪やあ地の舞れたるも  
はつ山よわあつたる柱の上

近江 霜津  
新巻  
園仙  
林竹  
破水  
向空  
木田  
色菫

冬六

初雪あつたまの初八交縁あり  
さし山よまよけし小便あり何奴を  
はつ雲や枯木の上よも蘭やと  
初雪の後のうはふ飽えく  
初雪や人の機嫌の初雪名内  
さつ雲やうれやさつ雲出の初  
初雪や顔の初雪さつ雲月夜  
初雪や城直まをさつ雲  
さし山よわ山子後ろくく雲を  
はつ山よわ山子後ろくく雲を

さ角  
曲要  
及  
松隣  
山川  
元春  
破城  
路通  
文考



さしゆの紀伊横川の秋乃三ふ  
初雪か巻きこむあり麦の畝  
は川雪やまののひる相果よ  
さしゆやえもをうは初雪  
初雪や何んらんらんらん大  
初雪も巻きこむのさしゆ  
は川雪のつん中やまの巻果に  
さしゆは巻きこむの巻果に  
初雪は巻きこむ巻果の巻果  
さしゆは巻きこむ巻果の巻果

千那 孤登 錦水 許六 斜炭 刺半 藤吉 治七 土ん

七

初秋

さしゆやまの巻果の巻果に  
さしゆは巻きこむ巻果の巻果  
初雪は巻きこむ巻果の巻果  
は川雪やまののひる相果よ  
さしゆやえもをうは初雪  
初雪や何んらんらんらん大  
初雪も巻きこむのさしゆ  
は川雪のつん中やまの巻果に  
さしゆは巻きこむの巻果に  
初雪は巻きこむ巻果の巻果  
さしゆは巻きこむ巻果の巻果

巻果 初秋 巻果 巻果 巻果 巻果 巻果 巻果 巻果 巻果

巻果

冬の月

け木戸や鏡のまじり冬月  
桐の木若葉まじり冬月  
雪の万の月まじり冬月  
冬月や花合ふ冬月  
は光りまじり冬月  
まじり冬月  
冬月  
冬月  
冬月  
冬月

其南  
冬葉  
若弓  
秋風  
去葉  
母解  
冬葉  
冬葉  
冬葉

冬八

寒

俗を枕り波かきまじり  
塩胡の葉まじり冬月  
松葉と焚くまじり冬月  
雪のまじり冬月  
冬月  
冬月  
冬月  
冬月  
冬月  
冬月

冬葉  
冬葉  
冬葉  
冬葉  
冬葉  
冬葉  
冬葉  
冬葉  
冬葉  
冬葉

人亦亦夜半は此の故をいれ  
 手も知さして机の上のふききさ家  
 使名一人女院へ通致をこの郡  
 彼あらしき夜の音の空しくれ  
 物事の意り取らるるをいれ  
 鴨川君一飲まぬしは更さる  
 ついでして書つらまうと  
 高知郡や二階の下にお車料戸  
 猫が食干かひひと飲まうれ  
 雪あままごかかりおまぬと

此故  
 舎院  
 之角  
 本等  
 風國  
 彼是  
 探志  
 山石  
 層良

冬九

落葉

若葉初孔梳の言ふそくは  
 つくろくはかたゆく通るをいれ  
 かつ鐘の戸り吹あたる寒く  
 起る中しはかたやねと寒く  
 雲のたれあまきや海の雲  
 猫君の目の寒あたる寒く  
 百子のきりれと冬の高葉  
 掃あらし牛乳背中の落葉  
 力たれ掃りかきあらし  
 狼女をたれけりて落葉

海上  
 点次  
 千仙  
 兔士  
 舞川  
 曉春  
 芭蕉  
 如行  
 巴風  
 程已

木葉

兼虫の夜ひのまきへ落しつ  
揺り置くは燭のさつろ落葉の  
川をくたきもや落葉のさつろ  
我士古名兼もも揺り落葉の  
怖れを懐り志くも落葉の  
まへくゆきも揺り落葉の  
あへてたるともさつろ落葉の  
一物能はく揺り落葉の  
まへくゆきも揺り落葉の  
ちれきも花も及ぬ木のさつろ

玄梅 落葉 左辭 巴辭 木兒 後川 馬次 文百 守氏

冬十

枯葉 木枯風

三尺の山もゆりも木のさつろ  
大うと木木のさつろあへての完  
葉のりり足さつろも木葉の  
水刃か岩もさつろ木葉の  
葉葉のりりもさつろ木葉の  
ちる木葉の中もさつろ木葉の  
水刃のちるもさつろ木葉の  
あへて木葉の中もさつろ木葉の  
木枯の一日吹くもさつろ木葉の  
木がりりもさつろ木葉の

芭蕉 秋風 松風 文子 葉子 露友 相雨 言水 涼菟 芭蕉

あつりや川田の吹巻洪水水  
木がしり二百の月の吹と吹の  
風や沖をさすもさす山を切  
こがしやをさすもさす山を切  
木のしりや村遠へて音もせぬ  
木枯やつてをく味し様もあ  
おほし木枯の柿もあつりや  
おど木枯よりもさすの葉も  
木枯も二の葉もあつりや  
あつりやも葉もあつりや

性流  
若手  
さ角  
若月  
子欄  
おん  
出立  
子英  
治房  
文考

冬十一

冬木立

木のしりや木立もさすの年  
木のしりや葉もあつりや  
風や或夜ひそくに音をさす  
あつりやも葉もあつりや  
木枯や日もあつりや  
こがしやも葉もあつりや  
木のしりや葉もあつりや  
風やさしりもあつりや  
あつりやも葉もあつりや  
冬木立もさす山を切

林取  
若生  
兼伍  
真汀  
標良  
標愛  
標死  
伊豆  
東巴  
真角



枯蕨 枯萩 枯草花 枯蓮 枯菊 枯葛

蕨かれて妻の細き何れへ  
萩はくたはるる萩も  
枯草花 萩はくたはるる萩も  
蓮はくたはるる蓮も  
菊はくたはるる菊も  
葛はくたはるる葛も

惟然 新約 一髪 班象 柳水 其角 危言 危言 今我

枯考 枯草 枯野

蕨はくたはるる蕨も  
萩はくたはるる萩も  
蓮はくたはるる蓮も  
菊はくたはるる菊も  
葛はくたはるる葛も  
草はくたはるる草も  
野はくたはるる野も

為有 秋風 刺牛 去芳 支考 智月 其角 曲琴 許六 牧童

とくくと梅子咲きふ枯れん  
葉落く度ふまのたうの  
よも出さく木君のひ枯れん  
ゆまの枯れん入老歌うれ  
嚙衣老ありあまのたうの  
枯あり用うの枯れ小松の  
とく々草枯れくさり志す  
吹きんお日大ぶかしお系  
念佛のほろりとやうの枯れん  
よらくぬのののともえうの  
尚ふ  
末山  
重行  
吾仲  
約奎  
蓮之  
宗瑞  
十磨  
麦水

枇杷の花

月さつら去らりぬれ枯れん  
夕のほろりと帰ふうの  
つり咲くつ散やんひの  
ひとのふれもそあゝぬの  
冬の日我密よりけひの  
ふまの花やいさく枯れん  
ゆまのつらよるぬれは  
山茶花や秋の散りて後  
何れ木と回まうの  
雨竹  
汀雨  
尚ふ  
涼亮  
性翁  
曲琴  
泉袋  
栄友  
侍太  
末山

茶の花

帰花



春をゆく川をささるる水 仰りて  
 仰り花をさくや山にの毛氣あり  
 忘れぬに春を消去るを  
 了神多げう子能くう仰り花  
 かくて花日のやまを恨み  
 表まきさ秋のあそびや仰り花  
 春はゆくのあそび性形うに  
 春は夜の夏入くまや仰り花  
 積まると嘆く人さう仰り花  
 春はあそび教るや多かるる

明水 怒風 露川 曲翠 乙由 島洗 松書 子代 伊豆 連枝 吉田

ハツ子花

春をゆく川をささるる水 仰りて  
 仰り花をさくや山にの毛氣あり  
 忘れぬに春を消去るを  
 了神多げう子能くう仰り花  
 かくて花日のやまを恨み  
 表まきさ秋のあそびや仰り花  
 春はゆくのあそび性形うに  
 春は夜の夏入くまや仰り花  
 積まると嘆く人さう仰り花  
 春はあそび教るや多かるる

尚水 百里 叱囊 千代 貴古 色蕉 高川 一品 斜炭 鳥久

水仙

水仙下り炭あるはくはく  
 水仙下り炭あるはくはく  
 水仙下り炭あるはくはく

鳥久

綿木

葉の花

寒菊

その他三子入る花の後の  
さくらんぼも冬より花  
水仙もあまは光る花  
みどりやあまは花のついで  
綿木や傍り子葉の葉より  
葉のふれをあらうと花白れ  
葉のふれや摘む人花も  
葉のふれや摘む人花も  
葉のふれや摘む人花も  
葉のふれや摘む人花も  
葉のふれや摘む人花も

風平  
子代  
朱桂  
貞之  
心秀  
長天  
己筑  
芭蕉

冬十六

つばき

室屋

寒く葉のそと静か細うれ  
寒菊の傍もあややせ大根  
うん葉や一枝よ見ゆふ葉  
まじりやその花を摘むも  
かん葉や色く花の枝は後  
うん葉や一枝よ見ゆふ葉  
何骨のそと静か細うれ  
葉の下に葉がきりやつて  
葉の目も花の枝は後  
室屋も花の枝は後

村江  
許六  
寧院  
長英  
蝶友  
柳儿  
妙切  
屋元  
葉人  
室屋

大根引

物豆と並く味や梅のり  
骨も梅と身も煮て室の中  
難坪より小坊を煮る如大根引  
出女より投き通る如大根引  
白羽衣の道へ一抱大根引  
水鼻の煮る如大根引  
下うももろく飛ぶ大根引  
念佛より力の入る如大根引  
引切くおしと教と大根引  
子のちうは係根多引

冬七  
志理  
班象  
芭蕉  
許六  
知是  
倫参  
老士  
西川  
秋瓜  
子代

千葉つ

葉菜

麦荷

細代寺

木より一の葉身より約千葉  
一夜くも煮る如大根引  
君見せぬ我よりを葉の種  
刈りたおよほすの如葉の種  
若葉よりやあつあつ停置  
麦荷より狐の尻を火つけ  
麦荷より一疇の煮る如  
麦荷より煮る如  
静より数珠も名は細代寺  
煮る如

乙由  
僅子  
文車  
支考  
錢芷  
探丸  
丸雪  
色惹  
素数  
出水

氷急

あゝ身死まに死つゝはる火赤  
火の熱や人あき湯を細代り  
何れもりの雪の解と暮ら  
猶元子月と地中絶つる身  
夜の雨仕合ふうの海を  
あゝ海もひそくに鳴る乳  
雲は夜も女変形より細代身  
義なきくし後子存るあゝ  
氷とれ油重と化を救ふあゝ  
月うけ巻くくけて身より氷急

友元 言水 許六 牧老 般若 木兎 丈石 園更 宗濹 松登

染漬

たつへ  
年号

あゝ漬や夕日と眠く急の熱  
染漬や涼石なるあゝ急の急  
敷あゝも熱き仲老とあゝ  
あゝ磯やけしと刻る急友子急  
あゝ日如く月より急をわね  
あゝ風やあゝのれあゝあゝ急  
あゝあゝあゝ急の急あゝ急  
あゝあゝあゝ急あゝ急  
あゝあゝあゝ急あゝ急  
あゝあゝあゝ急あゝ急  
あゝあゝあゝ急あゝ急

如室 卯七 綿守 去来 乞南 曾良 知及 儲齋 山夕 丈子

鳴 龜

水鏡鳥子鳴風千鳥鳴夜半  
 立ちしやう浮橋ひのけり  
 夜ありや千鳥鳴る天海の山  
 うつろ歌又冷世く又遠入  
 一羽つ清り遠入る鳴れ雪  
 毛衣下清みくぬ下輪の足  
 鈴亀の如く鳴るは月夜  
 水鏡鳥子鳴るは朝の小鳥  
 鳴る鳥の巻くは清り中  
 打入るは枝かたは海のもの

乙兒 孝美 己峯 他多美 雲昆 色菴 丸雪 文孝 朱拙 北枝

鳴る鳥子鳴風千鳥鳴夜半  
 立ちしやう浮橋ひのけり  
 夜ありや千鳥鳴る天海の山  
 うつろ歌又冷世く又遠入  
 一羽つ清り遠入る鳴れ雪  
 毛衣下清みくぬ下輪の足  
 鈴亀の如く鳴るは月夜  
 水鏡鳥子鳴るは朝の小鳥  
 鳴る鳥の巻くは清り中  
 打入るは枝かたは海のもの

乙由 西齋 雨亭 山後 如賤 希因 常仙 賀吉

鳥 鷺

外橋の夜明の鳥の度数青  
あまの鳥も八白の水乃もさき  
扱の鳥人より鳥さる鳥の鳥  
杉鳥の鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥  
鷺鳥の鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥  
押鳥の鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥  
杉鳥の鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥  
鷺鳥の鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥  
水鳥の鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥

鳥上  
馬火  
野水  
柳若  
鳥光  
休遊  
素丸  
李由  
瓢界

水鳥

木鳥

水鳥の鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥  
水鳥の鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥  
水鳥の鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥  
水鳥の鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥  
水鳥の鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥  
水鳥の鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥  
水鳥の鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥  
水鳥の鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥  
水鳥の鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥  
水鳥の鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥

鳥貴  
乙酉  
休茂  
蕉雨  
春路  
茶境  
輝明  
月野  
印枝  
志海

竹鶴

雪より啼き見せりみせき力  
峽方若菜如和輝之文我まの  
つー菜の氣をまの竹鶴  
影に或よも小夜やまをまの  
の波中居居りてまの鶴鶴  
夜は自らも集へたや竹鶴  
船起る火打は夜やまをまの  
まのつる鶴を我まのや鶴鶴  
冷い中あまよて冷く大焚き  
おとなく雪は子よ何くゆん

大焚き  
雪は子啼

許六  
竹鶴  
山  
風國  
佐若  
叱藁  
鹿元  
苦雜  
涼亮  
仙雲  
卷北一

夜興引

竹鶴氣

さき情や琴弾おふ敷敷名真  
得免る風夜興の大ふまのふら  
歌興引や先り越行まののす  
夜興引者引あまのの月  
尾張の川りれまの竹鶴が  
生かすひのりゆ歌あまに  
うらと海月よゆらなゆら  
お波りり又まのまのまの  
砂系よ吹とれり海參りれ  
鹿鶴の角起りり竹鶴氣が

桂川  
氷花  
春波  
風付  
去来  
色惹  
車番  
如行  
大次

糖

河豚

生海鼠は夜に死すや毒を切し  
及びり去る人の命を中海鼠は  
市へ出くはる目の毒を切るは  
入是毒の切るは毒を切るは  
糖舟や比良の舟を雪舟と云  
名は事として果てくはる糖の後  
切るともや細くはるのよきと別  
河豚汁は海に舟を切るは  
切汁や切は糖を切るは  
糖賣の糖合くはる命を切

高川  
利登  
春波  
山李  
李由  
鯉魚  
玉蕉  
牛角  
永吟

天正二

狗豆汁

芹焼

飯汁や吟鳥たはけりくたは第  
漁人よりおひくはる飯の汁  
切くはるや一麻入くはる糖  
ひらくはる末はるは切ると汁  
みか近く糖く二人は河豚汁  
河豚汁は海に舟を切るは  
切るとは切は糖を切るは  
狗豆や石を切は糖を切るは  
糖賣の糖合くはる命を切

一洞  
去来  
兔士  
仙岩  
麦士  
布舟  
老平  
浮舟  
雙推  
魚蕉



楮

楮の火や暖くは名已六尺  
深この大や暖く是なり  
楮の火は狐や名色もかりり  
深この大より親子是より  
炭竈と名くは是は法也  
炭の油や香気よく立ち  
すは竈や麻の火く者より  
炭の油や日ぬ忽と松名上  
炭焼や種名清水衆と  
そは焼も思ふ名老の火也

大季  
高川  
採志  
去来  
不炊  
巴人  
瓦付  
牛角  
渭橋

炭

炭焼

炭

炭焼の焼ぬむの雪名枝  
花もはははありは炭焼  
語くたはて見名や炭名  
炭名は焼く名は名  
うは炭もその木名は名  
山の中はひ出くや名  
く地名は名は名は名  
炭名は名は名は名  
何事とも名は名は名  
かた名は名は名は名

忠知  
任口  
向和  
龍非  
真角  
高谷  
可全  
尊江  
小春  
融水

炭

炭

炭

紙子

物言の工事は志の志を教へん  
息身れ新なりき紙子ゆふ  
獨の事て市にの紙子を那  
ちり舞やたむかふ紙子を  
のりも在りかき紙子を  
定體よ食さる紙子を  
南よりさつる紙子を  
た先けく言んよまふ紙子を  
名詞は襟下紙子かこ紙子  
松風下紙子の色紙子

枕妓  
急素  
紙言  
條夏  
立介  
木導  
色菫  
高川  
涼菫  
冬北

蒲葦

足袋

紙帽子

紙巾

有る紙の作連仕ありて紙子  
息災とち紙あり紙子  
下に巻くも其紙のこも紙子  
毛紙や巾帷の紙子  
度つや大提蒲葦の紙子  
草足袋の紙子  
紙下履く巾帷の紙子  
初巻紙巾の紙子  
用のお紙巾の紙子  
履き紙巾の紙子

その  
素丸  
玄武  
涼菫  
之角  
一袋  
素因  
毛紙  
玄芳  
木導

湯婆

色く此改中のさてや丸歌中  
乾夕中夜産息水はけり改中  
ちつつ又よ何小友重たつまん  
湯穿うる名まきく喉て頭中  
湯婆うる幼の世きく乳まつま  
踏れも初にかきけり湯婆  
うる火や燈力のあせぬ法は  
此火や海園と連支葉の白  
うる火や以身うりる氣  
埋火より去蓋あきく白ひる

柳花 夢丸 也有 一幹 涼莞 佳木 色蕉 許六 百里 神叔

冬北五

埋火

火鉢

埋火や雪の養哉くままり  
うる火や神のたけり一ま露の雪  
うる火やあまのけり焼く持ひ  
今ひる山吹もはれ火鉢うり  
あまの衣やあまの火鉢も衣すの伽  
脈乃人指引のま火鉢  
おまあま進さびさる火鉢うり  
火桶抱く願勝をかき  
船改のよけし抱く火桶  
い書あま昇るて教り火桶

宗陽 巳人 風後 順水 秋色 吏明 他若 臨通 陽和 呼下

火桶

火燧

ほこくと船りさし 志老火燧  
ほつろ及松のさるや 巨燧  
つらとくふ 季老さきほつろ 火燧  
おがよわい 八高文巨燧 火  
子松の老若 一う 老若 火燧  
身より少くと 文老火燧 火  
足つれ 火燧 巨燧 火  
孫おがた 火燧 火燧  
待の如 火燧 火燧  
おがよわい 火燧 火燧

文字  
色老  
字老  
猿館  
魚日  
頭老  
野棠  
唐梧  
表波  
左辭

冬廿六

冬筆

おそく 足さし のさる 巨燧  
おがよわい 火燧 火燧  
佛より 老若 火燧  
金原 老若 火燧  
冬筆 火燧 火燧  
おがよわい 火燧 火燧  
人哉 吐く 息を 火燧  
唐老 老若 火燧  
汁 溜の 火燧 火燧  
火燧 火燧 火燧

玉葉  
可捨  
陸史  
色老  
千那  
涼菴  
之角

櫻たぐ交むりし傳子や冬籠  
 冬ありし物盡の物子の意うれ  
 狭路も我もさかひより冬あり  
 冬あり紫靴の筒の埃の那  
 ゆめあともり夜屋木のあし  
 焼もくこく丸く冬あり  
 冬籠傳りて車の舞に  
 下帯あやうけつてゆめ籠  
 夜帯につかり夜籠や冬籠  
 後よまへ字はのいさや冬籠

去芳 高川 心秀 木守 秋風 肥坡 彫蒙 木節 呂物 温故

冬廿七

冬楯

吹第り楯楯の皮や冬あり  
 若風出や冬籠をさかひ冬籠  
 落の棠その根楯に冬籠  
 一村冬籠りあし冬籠  
 山里冬籠る水冬籠  
 味く冬籠換楯や出冬籠  
 冬籠へつ冬籠の冬籠  
 吹あり冬籠さかひ北の冬  
 内あり冬籠杖冬籠た冬籠  
 冬籠り冬籠へ冬籠

棟爰 信徳 其角 肥坡 汎井 和及 肥水 洞色 伊奈 冬向 冬籠

山窓  
雪垣

雪の予  
つくろひのちねはくしき老等  
梅立く哉のほきやうはく

流菫  
正秀

十一月

冬至

雪の昼夜乃夜志乾乾を

乙州

晴

雪の夜乃夜志乾乾を  
雪の夜乃夜志乾乾を

伊豆  
朱栂  
如髪

雪

雪の夜乃夜志乾乾を  
雪の夜乃夜志乾乾を

身角  
雪角  
汎舟

雪

雪の夜乃夜志乾乾を

雪  
松周

雪

雪の夜乃夜志乾乾を

智月

雪

雪の夜乃夜志乾乾を

李由

雪

雪の夜乃夜志乾乾を

雲麻

雪

雪の夜乃夜志乾乾を

雪

雪

雪の夜乃夜志乾乾を

雪

雪

雪の夜乃夜志乾乾を

雪

雪

雪の夜乃夜志乾乾を

雪

雪

雪の夜乃夜志乾乾を

雪

空也忌

津敵

大師講  
御佛事

後と誰誰誰誰誰誰誰誰誰誰  
空也忌也重也重也重也重也  
その吉也 瓢箪子也 鉢也 鉢也  
本也 鉢也 鉢也 鉢也 鉢也  
今も形も如も川も水も鉢も鉢  
約豆切も重也重也 鉢也 鉢也  
鉢也 鉢也 鉢也 鉢也 鉢也  
鉢也 鉢也 鉢也 鉢也 鉢也  
鉢也 鉢也 鉢也 鉢也 鉢也  
鉢也 鉢也 鉢也 鉢也 鉢也

其角 表序 去来 何意 其角 色意 鉢也 兔士 何意 寺子

卷九

雷

雷公事也牛盜人とも計り出さ  
いさあつと雷公は物不所ま  
市入りいさあつと雷公の盆  
る我も泳ぶも雷公の盆  
雷公の何れも雷公の盆  
人我も雷公の盆  
雷公の盆も雷公の盆  
雷公の盆も雷公の盆  
雷公の盆も雷公の盆  
雷公の盆も雷公の盆

一方 雷公 雷公 雷公 雷公 雷公 雷公 雷公 雷公 雷公 雷公

驚き居るまは臨もをき一夜の雪  
那も心も雪ふらぬま何はは  
長くと川一まうや雪み系  
名おやうあけと見ゆら雪の入  
見ゆれふすまふたより如雪み雪  
雪の松おはるれも枝さむ  
傘衣いふりさりゆまのれ  
雪み居る我はあふの天さこ  
大雪や僕のあはるゆみ命を  
とふまに雪の風鈴のまみ外

支考  
支考  
九兆  
一品  
改村  
秋風  
北枝  
若角  
浪化  
介哉

舞りあひも刃まなり秋の雪  
夜の雪もさゆ起るもんゆ  
尾さゆり入通りり雪の乃  
ふ糸雪豆折蘭のまや秋の雪  
雪道やせんやま雪さるれ林む  
我子あはれあやり秋の雪  
糸尾も臨りあやわけの雪  
帆板り雪ゆらそや風井を  
雪の系はありなる木陰に  
無一葉雪と集り雪み居る

治徳  
筆毛  
四睡  
吾仲  
孤衾  
こ先  
藤号  
沈足  
此翁  
去芳



雪原 雪精

はつりしと破れぬ雪の原  
薄の雪の原の雪の原  
清く雪の原の雪の原  
雪の原の雪の原の雪の原  
雪の原の雪の原の雪の原  
雪の原の雪の原の雪の原  
雪の原の雪の原の雪の原  
雪の原の雪の原の雪の原

雪原 雪精  
雪原 雪精  
雪原 雪精  
雪原 雪精  
雪原 雪精  
雪原 雪精  
雪原 雪精  
雪原 雪精

雪佛 雪兔 吹雪

見ゆ事なき大雪の原  
佛の雪の原の雪の原  
佛の雪の原の雪の原  
佛の雪の原の雪の原  
佛の雪の原の雪の原  
佛の雪の原の雪の原  
佛の雪の原の雪の原  
佛の雪の原の雪の原

雪佛 雪兔 吹雪  
雪佛 雪兔 吹雪  
雪佛 雪兔 吹雪  
雪佛 雪兔 吹雪  
雪佛 雪兔 吹雪  
雪佛 雪兔 吹雪  
雪佛 雪兔 吹雪  
雪佛 雪兔 吹雪

みぞれ

一次雪やりさつしき架るのけ  
松抄りまふいふる敷みきり  
佛さの座ぬけて寝るそり  
川裁の禪を志ほふ又其れ  
子の危哉引さつしきとて  
いふれまきあはるの柱木坐  
ばらまき月取為る敷うれ  
寝る危のさつしきあはるれ  
柿の葉さつしきあはる敷  
はくぬ敷やや小浪水巻

歌水  
去来  
丈草  
毛氈  
繖皮  
色巻  
杜國  
耕雲  
卯七  
之角

霰

靉野まき川に焚けん玉河に  
ふ丁巻根りんまき敷もれ  
夜抄りに中てかきま敷の那  
そまき如瀬りたる河に流るれ  
そまきの葉もまきあはるま  
飛へふ木のあはるれや室の中  
ふま抄り何そりし水柱か  
井のり水のまきまきつら  
海木りりりりりりりりりり  
ほらふつふつしてそまき

光言  
支考  
高川  
木岡  
葉花  
舟坂  
夜舟  
花黄  
麻父  
胡園

氷柱

氷凍

氷凍つて月影さあつらん  
 凍つけた氷つまたなう無の凡  
 田舎氷の有け氷乾乾うれ  
 せりく氷のらあ辰小舟の舟  
 程破る夜の氷若氷さあうれ  
 あり木のお敷きわく氷の  
 ちりつ氷く我と砕ふ氷うれ  
 魚の乾乾のやう氷をあ氷うれ  
 枯草氷さあつて氷うれ  
 ありけさ氷の氷うれ

冬三

冬三

檉の花  
 太山樗  
 葱

氷凍つて月影さあつらん  
 凍つけた氷つまたなう無の凡  
 田舎氷の有け氷乾乾うれ  
 せりく氷のらあ辰小舟の舟  
 程破る夜の氷若氷さあうれ  
 あり木のお敷きわく氷の  
 ちりつ氷く我と砕ふ氷うれ  
 魚の乾乾のやう氷をあ氷うれ  
 枯草氷さあつて氷うれ  
 ありけさ氷の氷うれ

葱  
 太山樗  
 檉の花

人參引  
生薑煙  
雷煖苦

此本草子孫も葱の白く乳  
葱は赤く傾城の夕河  
相輝也衣書や引らん人參  
孔子のその其あはれ其  
汝書の名やきくも人參  
黒出書や我衣のよま油汁  
乳まきく標かきく人參の款  
取まきくおらた書の取在乳  
たの目の特那まきく乳  
いさも引書引まきく

存者  
其南  
名始  
文字  
所之  
果東  
子英  
文章  
世圃

文四

鷹

鷹狩

力草  
菱草

暖考

鷹狩同り老い山書のとらり  
物衣衣神遊と乳まきく  
たの目の特那まきく  
麦之書洞と書人參  
鷹かや初書と書人參  
子子个物の仕ややめ  
太儀引書引書  
暖考菱草  
杜も書と書鷹の力草

素心  
文考  
知七  
此書  
麦水  
後書  
及書  
文曉  
南水

稌實

初糲

乾鮭

いさ

稌つく男とゆふて味あう

七海中人も思ふく稌とら

て川舟や橋立の文方海に記

初糲やほかに志ある大江山

かきけや死する時老いのおま

干飯や割木と折れはあひふ

うらさげや二平もあつたく青

かたはきやいふくたう山が相

干鮭や既り枯木は花も味

八条成事と一口のいさうれ

万年

忍戸

成系

産友

電差

近之

万平

等絶

丸枝

日良

いさ

牡蠣

杜支葱

薬食

ともし陰子あけ付く鮫鱈煮は

筋起すや我少くはるぬあ漢

筋のあうれまかゝあひひひひ

かゆいやは後成煮く増あれ

杜支葱を拾ひしりあもは

けんまゝ教さるいかに薬食

あひり尺相さきく薬食

端の川持しゆくもれくまら食

菜のひき水も権那もくまら

獲鼓の川や狸もくまら食

蟹雲

真角

以雪

拙依

立介

文考

釋権

芙蓉

涼菫

苦舟

玉子酒 生美酒 茗羹酒 水鼻  
 美らひ若しらの女う乳 也有 松葉 蘇後 幻叶 氷花 碧葉 山川 櫻葉  
 志如世海をんやあがし薬巻 絶海 松葉 蘇後 幻叶 氷花 碧葉 山川 櫻葉  
 於座せら入り喰せん重し鳥 松葉 蘇後 幻叶 氷花 碧葉 山川 櫻葉  
 少くし日る者なり 松葉 蘇後 幻叶 氷花 碧葉 山川 櫻葉  
 名も亦中薬巻此のや生美酒 松葉 蘇後 幻叶 氷花 碧葉 山川 櫻葉  
 御焚く夜も無んらんそし偏に 松葉 蘇後 幻叶 氷花 碧葉 山川 櫻葉  
 ありしや何れも此の旅を 松葉 蘇後 幻叶 氷花 碧葉 山川 櫻葉  
 何れもや雪踏よし此の道に 松葉 蘇後 幻叶 氷花 碧葉 山川 櫻葉  
 梅枝折るも葉やけも葉に 松葉 蘇後 幻叶 氷花 碧葉 山川 櫻葉  
 流や 輝もあし家措の上よ 松葉 蘇後 幻叶 氷花 碧葉 山川 櫻葉

冬廿六

雪書 換 雪車  
 雪書や日あまらぬ於於か 素寄  
 かゆふの房も雪をたぐひぬ 東陌  
 ぬのりと雪舟もあまらぬ 荷子  
 き舟りや休むも直よきとぞ 菴洞

十二月

乙子朔日 正月事始 臘八  
 長孝のよきやとこ子の祝ひが 毛苑  
 事始もくち梅のし事し 尚白  
 雪も散り来より事さし 可若  
 臘八や夜も佛りぬらん 支考

仙名号

臘八や飯をさくしぬ地豆汁  
臘八や今朝新炊丹良甚乃味  
家目より酒走八日のをまき  
臘八やハ飯の薪も心裁出  
臘八や甘んぐ火焼の山を笑  
臘八や粥老中少も早の教  
臘八や酒と守眼老薬丸不  
臘八や膏のゆり無送ひ相  
佛名の礼を授く心裁  
仙名や菓好歌河望もわらぬ

許六  
性  
秋  
乙由  
墨  
六積  
大睡  
改念  
野水  
酒半  
冬飛七

寒只

寒の月

寒垢離

老らくのりりしきりし佛名  
佛名や飛りろあは後のる  
月必のあがり針立ん寒の入  
寒よ入ふは種一夜忘の禪  
夜鉢も空也の被も寒は月  
夜寒の解胃おつとよまは  
寒あり此追へるりやおあり  
寒垢離の机をさく衣さき  
寒らるの外もなふは  
寒垢離り田舎のたのけ実り

冬来  
吾茶  
色蓮  
魚袋  
芭蕉  
千川  
取具  
路通  
菱花  
老士

寒念佛

寒 推 籠 や 夏 の 湯 舟 也 又  
酒 飯 の 飲 酒 也 一 に 寒 念 佛  
お 子 孫 能 証 木 也 神 意 念 仏  
お 子 孫 能 証 木 也 神 意 念 仏  
お 子 孫 能 証 木 也 神 意 念 仏  
お 子 孫 能 証 木 也 神 意 念 仏  
お 子 孫 能 証 木 也 神 意 念 仏  
お 子 孫 能 証 木 也 神 意 念 仏  
お 子 孫 能 証 木 也 神 意 念 仏  
お 子 孫 能 証 木 也 神 意 念 仏  
お 子 孫 能 証 木 也 神 意 念 仏

安里 其角 文考 了耳 苦候 文素 存夏 素吃 風候 李由

冬 冊 八

寒聲

寒 聲 也 南 大 川 流 也 也 也 月  
旅 人 の 寒 聲 也 也 也 也 也 也  
寒 聲 也 凡 者 於 人 也 不  
寒 聲 也 凡 者 於 人 也 不  
寒 聲 也 凡 者 於 人 也 不  
寒 聲 也 凡 者 於 人 也 不  
寒 聲 也 凡 者 於 人 也 不  
寒 聲 也 凡 者 於 人 也 不  
寒 聲 也 凡 者 於 人 也 不  
寒 聲 也 凡 者 於 人 也 不  
寒 聲 也 凡 者 於 人 也 不

七角 枕妖 幸依 陳河 許六 咲梨 凡七 史邦 波那

寒造

寒晒



寒の水

汲みくくいふきや重の水

浮休

物に漬くを花さくをの

高治

黄への唇さ動く寒者

丹芽

鶏文

白の陰に鶏ばらむ日南うれ

物受

鶴葉

かきたや松のふひの葉のふ

東来

困兒

あはれまをく重の如く困兒が

元兆

目見をく妹つくりひなこの門

為豊

札鶴

張るくく葉は侍くや札鶴

巴舞

衣配

衣配りや西へ色試すく色

とこ

又策のまじり換ふる衣配り

芳良

冬世九

年貢

姉妹いともく色や衣くも

木茂

解のよ試さくく色や衣配

木導

裁肩あ末の子り衣くも

山峰

お織あくる色あまの貢り

名圖

節分

節分あ我まといりあの子

猿雛

昔分やあま敷のまど川

熊鷹

年越

年越やあま色をの焼くま

輕舟

少くも色をあまうと敷かうれ

遊魚

露身

涼戸の石見あま床かや露あね

片堂

露身一夜り色くく色りり

秋毫

上野

鳥羽

尾張

伊賀

山崎

遠東へ舟白ありて寒舟

舟白

素因

厄掃

今川より子とてあり厄掃

四膳

豆坊

梅福の出たるあり厄掃

素因

終夜

豆とてあり公事記ありん

地坡

禰氏流

朝の終夜とてありん

終夜

年内暮

終やとてありん

柳花

冬四

連舟の去まるとありん

許六

雪の白くありん

了ん

雪の白くありん

先士

年木樵

年代

日如きありん

至尾

年木樵

色蕉

煉掃

煉由

煉掃や困が表よりありん

先蒙

煉掃の石よりありん

木導

煉掃不動ありん

眼う那

何れよりと掃き入る掃  
 せ掃や二階と下は古皮箆  
 う鍍も出く掃きう掃掃  
 煤掃く何やうたる炭家の内  
 煤掃く焼あうく製り架  
 せ掃や何やうと掃きま  
 掃く掛け壺をぬ者の掃き  
 大馬丸の南があらやと掃  
 煤掃や掃りゆるる月の月  
 せ掃や掃きゆるりたる小葵

掃  
 手環  
 電  
 月下  
 樹松  
 文考  
 尚  
 乙由  
 可  
 風亭

先王

餅搗

有明と三十四よちう餅の  
 餅つまや大のえらる餅を  
 りち掃きや火とふく餅を  
 正月のあけとや餅の青お山  
 餅つまや芥のちを敷谷の  
 餅つまや風自れと餅の  
 りち掃きの後と焼けて散  
 子産の二の突や青餅  
 餅つまや花の笑ふ出立  
 目よかた掃きや掃き

芭蕉  
 許六  
 伏水  
 吾仲  
 の凡  
 角  
 水  
 茶  
 芭蕉  
 一洞

餅花

青庭

節季

姨等

節季のや白くし来るる海  
きれいり又取起ふ事はか  
氣下りむる女時と云く一節季の  
節季後の梅子とぬるは程れ  
節季のいれぬ娘の子孫とや  
節季の梅の道にま遠入は  
可れいり約り来とくれり  
節季のいれぬもさぬ人なれ  
姨等とく節季のいれぬかまき  
は法事なれぬれぬの娘等

伊賀 龜嶺  
東山  
櫻後  
老士  
伊賀 蓮之  
田平  
武部 古田  
京 六右  
仙行

美市

此の市線番賞よ出とやれ  
あはれはたもゆきの市の換  
神もさつや美市者  
福あつとる心もさつ年美市  
喧嘩もする傳多羽りぬりの市  
海山の物一節りとも美市  
節針ぬぬ子板賣の詞りれ  
是と云く美市板賣の端りぬ

色蕉  
齋  
志末  
牧童  
立志  
壽江  
信徳  
宗電

越中賣

種長賣

山里のゆきはさく種長賣

可風

柴味黄  
去黄  
白去立  
古曆

冬の尾と踏ちまうれ分多木黄  
松黄や大系あさう此詞つれ  
我夜あ松黄よまきく歌り  
古曆海と文八方の多きん  
あしとる也未前の種れ切歌曆  
埃とよにたへ光り曆うれ  
此一忘れ後種あして神りり  
廿月以て多きま歌接種うれ  
多日まら重日松名花去ん  
冬一忘れ等り銷して神りり

高川  
志心  
周升  
先雪  
阿音  
此乃  
升去  
色蕉  
酒堂  
黄丸

年忘

冬四十三

寒毒

早咲梅

臘毒

此一忘れ梅りりあさうれ  
寒毒如堂外まきくはくくと  
寒梅やよ山道くまきんを  
わつらうと忘るも在り如冬の木  
後念の候くく人冬木る先  
多と去の事とと梅の咲りり  
冬毒のあさ川ぬらわ冬の色  
堂り乳方見もや冬木梅  
了梅無分とやり物由也の意  
臘毒も咲くあつくも色

松舟  
周之  
止法  
性然  
露沾  
此通  
去芳  
冬羽  
旅南  
浮来

子候様

火の河く歳日よあらぬ冬つて  
冬は冷とまよ嘆り冬は寒  
い満き乳老よつるむや冬椿  
山外の兄弟に些の沙是れ  
何りけ沙是の市よりけ  
世の中は、獨りよとの際走れ  
雪隠りて成る浦の沙是れ  
侍妻や机りそろふ書の小口  
侍春や氷り満ちぬちり芥  
妻月やきの子がねるや戸

一笑  
近  
忍

苦本  
乳堂  
色蕉  
如行  
免士  
浪化  
智月  
の風

冬四十四

師走

春と侍

春と侍

年暮

春らるれ三多味言の若狭うれ  
妻ちくく梅積りゆふ菜畑が  
ちのりれ若狭へうれ冬のもく  
子哉林くさけなき新年の暮  
やぐる人の数もへん老のうれ  
絵巻いさ敷甲斐あし冬の暮  
すけまや女の目映やしの暮  
かねくと入りいしの暮  
我虫くよ免ぬ物ありしの暮  
祖父あ山笠は使瀬二年の暮

李由  
毫洞  
希矩  
其角  
色蕉  
信徳  
絡通  
尚念  
木因

行年

年のうらみおとすは是れをかく  
 端蓋のけしきくさし年の暮  
 野一を今も数へは多かれ  
 出典をもまことしめしに半  
 事多きくしきく書に  
 追憶もこの情あり  
 同出友に懐かしの年暮  
 川うらやなぬくあそびは  
 初年や登り初めは  
 川多き軟よぬく子よは

月下 孤空 智月 秋風 露川 文重 蓮之 湖春 毛雨 休山  
 冬四十八

大世目

川のうらやなぬくあそびは  
 初年や登り初めは  
 川多き軟よぬく子よは  
 川のうらやなぬくあそびは  
 初年や登り初めは  
 川多き軟よぬく子よは

雲鼓 去来 汎木 風玉 許六 寢院 希周 西端 松来 技舟

冬籠

大々々や秋子係者さう者ひ  
大々々や冬のをりる人ん  
け中より聖元日をけり  
瓜とて心やけりや冬籠  
冬籠木のりけり冬籠

一万字  
羽衣  
史書  
冬籠  
利合



